今、この人に Interview（いんたびゅう）

パートナーの生まれ故郷の日野でクラフトビールづくりに取り組む

ショーン フミエンツキ さん

日本にいる外国人と一緒に盛り上げていくことで、地方の将来も多様性と活気のあふれる明るい社会となります。

▲滋賀農業公園『ブルーメの丘』内にあるHINO BREWINGクラフトビールの醸造所で。「ブルーメの丘で使用されていた醸造所が休止されていたので、初期費用も考えてここで醸造を始めました。ありがたいことに、町内の人がボランティアで掃除を手伝ってくれました」

■ショーンさんは日本語をどのようにして習得したんですか?

2006年に来日した頃は近江八幡で暮らしていましたが、日本語を話せるようになった大きなきっかけは日本人の友達ができたことです。その友達とは京都で出会ったのですが、偶然にも東近江市在住で、言葉は通じなかったのになぜか居心地がよかったんです。彼ともっと話したい、話を聞いてほしいと思うと、日本語が頭に入ってくるようになったんです。そのうちに、日本語で日常会話ができるようになりました。そこから自信がつき、自らアプローチして新たな友達もできるようになりました。

■その後2010年には日野町に家を建てられたということですが、何かきっかけがあったんですか?

当時は日野で開いていた英会話教室が私の仕事でした。長女が小学生になると、午後3時頃までには自宅がある近江八幡に戻らないといけなくなったので、不便を感じて日野に移住しました。あとは日野祭ですね。初めの頃は、見ているだけでしたが、家を建てた地区の町内会に入ると早速、ちょうど1人足りなくなった神輿の担ぎ手をお願いされました。実際にやってみると、神輿の担ぎ手80人が1日で友達になり、日野祭が大好きになりました。祭りでは日本人も外国人も関係なく、みんなが同じ目的を持って一つになるんですね。それがすごくかっこいいと感じ、日野が好きになる。まさに日野マジックです。

■最近は、町内会の活動に参加しない人が増えていますが、抵抗はなかったんですか?

私は地域活動に積極的に参加しています。町内会の役員をしているとみんなと繋がることができるんです。役員の仕事を一生懸命していると、朝の散歩でもあいさつしてくれる人が一気に増えました。ただ、日本の人は役員を引き受けるとずーっと頑張らないといけないと思い、自分の用事があっても「休みます」と言ったら悪いからと無理をしているような気がしますね。忙しければ「今回は休みます」とはっきり言えばいいと思います。私は自分が忙しいときははっきり断ります。その代わり、次に出席した時は一生懸命頑張りますよ。

■日野祭で出会ったお二人とHINO BREWING株式会社を設立されたということですが、祭りとビールづくりはどのように繋がったのでしょうか。

3人とも祭りで飲むお酒に注目していました。祭りのとき、日本酒は地元のお酒を飲むのに、ビールは大手メーカーのビールしかありませんでした。祭りにあうクラフトビールで若い人の参加を促し、一緒に神輿を担げたらいいな、という思いを3人で共有したんですね。古い神輿とか曳山といった歴史のあるハードウェアはあるけれど、それを担ぐ人間というソフトウェアが足りないのが今の祭りの現状なんです。古き良きものの中にクラフトビールづくりや若い世代の人たちのような新しいものを入れることで、祭りも元気になるんです。さらに、こうして日野からできた考え方を日野ブランドとして国内外に発信していきたいですね。外国人をただの働き手としてだけ受け入れるのではなく、これからは私たちのような日本にいる外国人の考え方の良い部分を仕事や活動に取り入れて一緒に盛り上げていくことで、地方もきっと将来が明るくなりますよ。多様性と活気あふれる社会です。

■地方では若い人が地元から外に出てしまいがちですが、ショーンさんの経験を踏まえて、若い人を呼び戻すにはどうしたらいいと思いますか?

自分のアイデンティティというものは家族やその周り、育った地域の影響を受けています。その上で、私は小学1年生からダンスグループに入り、夏休みにヨーロッパ中をホームステイして回り、外国文化に興味を持ちました。その後も、アメリカや日本でいろんな価値観に出会い、経験を重ねました。1か所ではなく、いろんなところに出て多様な価値観や経験を積むことが大切です。その上で、各地で見た良いものや自身の経験を地元に持ち帰って生かせられる環境があれば、地元に対する見方も変わり、良い生き方ができるのではないかと思います。

● プロフィール ●

ポーランド出身。1996年にアメリカに移住し、大学時代に出会った日野町出身の女性と結婚。アメリカ内で転居を考えていたところ、義父からの「日本に来てみたら?」の一言で2006年に来日して近江八幡市に。その後2010年からはパートナーの生まれ故郷の日野町に家を建てて移り住む。日野祭で出会った地元の酢屋忠本店6代目の田中宏明さんとイギリス人のトム ヴィンセントさんと意気投合し、祭りに合うビールを作ろうと、HINO BREWING株式会社を設立。当初は英会話教室経営の傍らでのビールづくりだったが、現在はクラフトビール製造を本業にしている。

HINO BREWING(株)

馬見岡綿向神社の神の使いとされるイノシシをデザインした「ヒノシシ」がトレードマーク。"ドントヤレIPA""ヤレヤレエール"など日野祭の掛け声などを元に命名。「どんな場面でどんな雰囲気で飲んでほしいか」をイメージしながらビールを醸造している。

ホームページからも商品購入できる。

■最後にショーンさんの夢を聞かせてください。

ちょっとSelfish(自己中心的)かもしれないですが、私自身はこの仕事を続け、その自分の生き方を子どもが見て、同じようにこの仕事を引き継いでくれるなら、それはとてもかっこいいことですね。この前、ポーランドに留学している長男がビールをつくりたいと言ってくれたんです。すごくうれしかったですし、ぜひ実現してほしいですね。